

『宗鏡録』の成立

王 翠 玲

一、永明延寿と『宗鏡録』 永明延寿は、中国仏教史の流れにおいて、禪淨双修説、教禪一致説を主張した一人として、特に重視されている。彼は一生涯に多くの作品を編著し、その諸著作には彼の思想が結晶し残っているが、個々の著作の執筆時期が不明であるために、延寿の思想的脈絡とその展開は不明なままとなっている。『宗鏡録』の思想、または永明延寿の思想体系に対する研究に新たに取り組むことが今日の課題となっているように考えるが、そのために、『宗鏡録』の成立をめぐる諸問題の解明が先ず必要となると思われる。

二、『宗鏡録』の成立 『宗鏡録』はその成立直後から重視され続けたが、この『宗鏡録』をめぐるのは、様々な問題が未解決のまま残されている。それは、例えば、その成立時期・編纂協力者・編纂場所といった問題である。延寿は多くの著作を著している。資料によると、七十部以上のものが伝えられている。よって、延寿の著述の間には時間的変化が見られる。この点で成立時期を考察することは、延寿の思想を理解する上で欠くことが出来ない。編纂の場所も同様な点から、検討すべき問題といえる。一方、『宗鏡録』の編纂には協力者の存在が推測されるが、その編纂協力者は、『宗鏡録』の主たる特色である融合の思想と密接な関係があると思われる。そこで、融合思想の基盤がどこに位置しているかを問うことは、『宗鏡録』の基本的立場を見究めることに連なる。

この問題の解明は、従来あまり進められてこなかった。そこで筆者は、①編纂協力者、②編纂の場所、③編纂の時期、を考察することによって、『宗鏡録』を延寿の思想形成過程のどこに位置付けるべきかが明らかな解明を試みた。その場合に、扱う資料の問題がある。延寿の伝記或いは周辺状況を示す資料は数多くある。ただ、『宗鏡録』の編纂に触れたものは『禪林僧宝伝』巻9及び『林間録』巻下だけであり、これを用いる。そして、①の問題は、同時に当時の呉越国仏教界の状況を反映しているし、③の問題は、呉越国の範囲を超えて、呉越国と日本、及び呉越国と高麗国の文化交流の問題にも関わり、さらには、中国の天台宗が典籍を

海外に探し求めたこととも関連してくる。

この三つの問題は相互に密接な関係にあるため、以下、総合的に論述していきたい。

①編纂協力者について 編纂作業の参加者について考察していくが、覚範慧洪(1071～1128)『林間録』巻下に次のような記載が見られる。「予嘗遊東吳，寓於西湖淨慈寺，……寺有老衲為予言：永明和尚以賢首・慈恩・天台三宗互相氷炭，不達大全，故館其徒之精法義者於両閣，博閱義海，互相質難，和尚則以心宗之衡準平之」(『卍統蔵』148，頁645下)。この慧洪の記述から、「其の徒」，即ち華嚴(賢首)・法相(慈恩)・天台の三宗の法義に詳しい比丘が『宗鏡録』の編集に関係していたことがわかる。「其の徒」は誰を指すのか。第一にそれぞれの宗派の宗徒という仮説が立てられる。しかし、以下のような反証がある。即ち、当時の呉越国の仏教界を見渡しても、慈恩宗徒は殆ど見られず、賢首宗の勢力も弱く、そして天台宗は経論不備の状況であったから、三宗の知法比丘を集めることは困難であった。仮に集めることができたとしても、他宗に属する知法比丘が、自宗の教義が延寿によって禅宗の宗旨に包含されていくことに抵抗しなかったであろうか、という疑問も生ずる。そこで、筆者は、「其の徒」というのは、延寿の門下二千人のうちの優れた一部の人々ではなかったか、と推測する。このことは延寿が三宗の文を引用しながらも、ほとんど三宗の立場に依ることがなく、専ら禅宗の立場をとっていることと整合性がある。

②編纂の場所について 編纂の場所についてであるが、『宗鏡録』の草稿は雪竇寺で完成したとの説が見られるが(石井修道氏「永明延寿伝」)，これはまた検討の余地がある。何故なら、延寿が在住した他の仏寺志類などには『宗鏡録』の草稿が雪竇寺で完成したという記載は無く、そもそも『雪竇寺志』自体が延寿に対してそれほど詳しく述べてはいないように、他の史料も雪竇寺時代の延寿の事蹟には重きを置いていないからである。また、960年に靈隠寺で編集されたと推定する研究者もいるが、延寿が靈隠寺の住持を勤めた期間は960年から961年であって(『景德伝燈録』巻26)、永明寺の住持を勤める前であり、また、冉雲華氏は「延寿仏学思想的形成」にも言うように、百卷に及び大部の『宗鏡録』の編纂を一年ほどの短期間で完成させることは無理と考える。更に、延寿は靈隠寺の住持を勤める間、靈隠寺の復興建設に精力を傾けており、『宗鏡録』を編纂する時間も余裕も無かった、と思われる。因に、宇井伯寿氏は『第三禅宗史研究』には「961年に成った」と述べている。冉氏は『永明延寿』には「約於962年開始編纂」と述べて

いる。以上、成立年代を考えることによって、編纂の場所を特定しようと試みたが、現在のところ、永明寺で『宗鏡録』が編纂された可能性が最も高いように思われる。

③編纂の時期について 編纂の時期についてであるが、結論から先に述べると、現在のところ、『宗鏡録』の完成時期は、高麗国の使者が慧琳の『一切経音義』を捜し求めた後周の顕徳年間（954～9）から、円空智宗が帰国した970年までの間である可能性が最も高いであろう、と思われる。編纂の時期について考察するにあたっては、それとあわせて検討すべき問題が多々あるが、それらは以下の三点に絞られよう。甲、当時の呉越国に經典・史料が存在したかどうか、という問題。乙、散逸した典籍を天台宗が探し求めたという問題。丙、高麗僧の呉越国渡来に関わる問題。

甲、まず当時の呉越国における経蔵の存在について考察したい。潜説友『咸淳臨安志』巻78「梵天寺」に、忠懿王錢弘俶が大蔵経五千四十八巻を制作したことが記載されている。さらに、僧侶個人が経蔵を持つこともある。このような環境は、延寿が三百部もの典籍を引用して『宗鏡録』を編纂するには極めて有利な条件を提供したと言える。このように盛んに經典が印刷され流通した呉越国の状況を見ると、会昌の毀仏（845）によって五代の頃に經典が散逸した、という通説はかなり修正する必要があるように思う。少なくとも、呉越国の状況とは異なると思われる。しかし、その一方で、『仏祖統紀』巻23などに、天台宗が散逸した經典を海外にもとめた、と記すことをどう理解すべきか、という問題が生じる。そこで、次に、この問題について考察したい。

乙、天台宗が散逸した典籍を探し求めたこと。これは呉越国と高麗国と日本の三国間に渡る問題である。呉越国時代の呉日間の文化交流について、日本側の記録が『日本紀略』後篇2・『本朝世紀』・『本朝文粹』巻7・栄西『興禪護国論』巻上などに残っている。それらの記載は不充分であるが、呉越国が日本へ天台宗の典籍を求めたことは確認される。したがって、森克己氏『日宋文化交流の諸問題』と積東初氏『中日仏教交通史』は俱にこれを事実と承認している。しかし、散逸典籍をめぐる問題に向けられた日本側の関心は強くなかったようで、この日本に対する經典採訪は効果的であったとは思われない。

次に、呉越国と高麗国との文化交流について検討したい。まず、呉越国と高麗国の文化交流に関連する人物や出来事について挙げておきたい。①忠懿王錢弘俶の在位年間：947年12月～978年5月。②高麗光宗の在位年間：950～975年。③錢弘俶は使者を新羅国に派遣して、典籍を繕写させた：948年（清代呉任臣『十国

春秋』巻84を参照)。④高麗国が派遣した使者が浙江地域に入って、慧琳の『一切経音義』を捜し求める：後周武帝の顕徳年間(『宋高僧伝』巻5「釈慧琳伝」)。⑤高麗僧の円空智宗が呉越に赴き、円寿に師事した：956～61(「居頓寺円空国師勝明塔碑」)。⑥高麗国が諦観を呉越国の義寂の下に遣わして中国に天台典籍を伝えた：960年。⑦諦観が国清寺に到着した：961年(『仏祖統紀』巻8)。⑧高麗僧の円空智宗が国清寺に登り、螺溪義寂に師事した：961年(同上)。⑨高麗僧の道峰慧炬が法眼永明の教えを承けて、帰国した：宋建隆年間(960～2)。因に、「寂然国師慈光塔碑」によると、慧炬は自分の弟子である寂然英俊を乾徳四年(968)延寿に師事させた。⑩道峰慧炬が光宗の国師になった：968年(『高麗史』巻2)。⑪円空智宗が高麗に帰国した：970年。⑫『宗鏡録』に引用されている天台典籍は智者大師『摩訶止観』など二十五部以上にのぼる。上述の諸事跡だけからも窺われるように、呉越国時代の両国の交流は、非常に活発に進められたようである。呉越国が朝鮮半島で散逸典籍を探したり、高麗国の僧侶が呉越国に行って經典を求めたり、有名な法師に師事したりすること等は、殆ど恒常的に行われていた。延寿の『宗鏡録』編纂作業とこの天台宗の經典採訪との間に、果たして繋がりがあるかどうか、という疑問を抱かれるかもしれないが、『宗鏡録』が三百部もの典籍を引用していることと、覚範慧洪の記載の二つから、天台宗の經典採訪は『宗鏡録』の編纂と関連すると思われる。諸資料をつきあわせて、現在のところ、『宗鏡録』の完成時期は、上述のように、954年から970年までの間である可能性が最も高いであろう、と思われる。

【結論】 以上の考察から、以下のような結論が得られる。まず、編纂協力者については、諸々の周辺の状況から考えあわせて、法眼宗内、延寿門下の人々が、編纂に協力したと考えられる。その場所については、永明寺であると考えられる。また、時期の問題に関しては、954年から970年までである可能性がもっと高いと思わせる。なぜならば、編纂の時期を論定するには、この著作を可能にした周囲も要素をも考慮に入れなければならない。つまり、天台宗の典籍の採集、高麗国との文化交流、呉越国内の經典整備がそれである。このことは、『宗鏡録』の天台典籍を含む豊富な引用と、教理の利用とを周辺資料から補完していると言える。また、編纂協力者に対する仮説は『宗鏡録』が常に禅宗を立場とし、諸宗の思想を融合したことを裏付けることにもなった。

〈キーワード〉 永明延寿、『宗鏡録』、呉越仏教

(東京大学大学院)